



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市部の独居高齢者における危機管理としての近隣との交流 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	工藤, 禎子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(看護学)
Dissertation Number	甲第11435号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55591
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiko_Kudo_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（看護学）

氏名：工 藤 禎 子

学位論文題名

都市部の独居高齢者における危機管理としての近隣との交流

目的

わが国では65歳以上人口のうち、独居者は男性の11%、女性の20%であり、今後も増加が見込まれる。高齢者の独居という生活形態が罹患率・死亡率の高さと退院困難のリスクとされてきたが、独居高齢者からみた主観的なリスクは明らかではない。また、高齢者の生活の質及び健康と近隣の人との交流の正の関連は量的研究による知見が蓄積されてきたが、独居高齢者にとっての近隣の意義や近隣との関係構築方法に関する研究は極めて少ない。そこで、独居高齢者の安全・安心な生活の維持をめざした支援のあり方を検討するために、独居高齢者のリスクの構成要素と、近隣との交流が危機管理資源として対応可能な範囲を明らかにする必要があると考えた。本研究では、都市部の独居高齢者における生活上のリスクの内容、及び危機管理としての近隣との交流の意図と方法を明らかにすることを目的とした。本研究では、危機の中でも生命や生活の破綻の危険が高まる可能性を意味するリスクに焦点を当てた。

方法

1. **研究デザイン**：エスノグラフィーに基づく質的記述的研究を行った。
2. **研究フィールド**：北海道内の一都市で40年前に造成された人口2.8万人の一地区である。
3. **情報提供者**：65歳以上の独居者26人と、高齢者の支援に携わる関係者（行政職員、地域包括支援センター職員、民生委員など）33人とした。
4. **調査方法**：エスノグラフィック・インタビューと、独居高齢者の集いの場への参加観察によるフィールドワークを行った。インタビューでは「生活上で『何かあった場合』と聞いて思い浮かべること」「生命や生活の破綻の危険を感じた体験」「『何かあった場合』に備えていること」を質問した。インタビュー内容は録音し、逐語記録とし、観察した事項はフィールドノートに記録した。
5. **分析方法**：逐語記録とフィールドノートから、リスクと危機管理の側面について、個人別の一覧表を作成した。リスクと危機管理について類似する内容をコード化し、カテゴリ化した。リスクの種類別に危機管理の内容を分析した。質的研究の真実性の確保のために、信用可能性、確認可能性について質的研究を行っている研究者及び高齢者の支援に携わる実践者等の確認を受けた。
6. **倫理的配慮**：北海道大学大学院保健科学研究院倫理委員会の承認（平成23年、承認番号11-11）を得た。研究の目的、個人情報保護について情報提供者へ文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。

結果

以下はカテゴリーを【 】で表す。

1. **都市部の独居高齢者のリスク**：リスクの内容として【緊急時に自分で対処できない可能性】【身体機能の低下による生活障害の可能性】【自立を侵害される可能性】【認知機能の低下による生活障害の可能性】【孤立の可能性】【最期の尊厳を侵害される可能性】【孤立死による社会的な問題

発生の可能性】【安住の場を手放さざるをえなくなる可能性】【経済的基盤の破綻の可能性】【アクシデントの被害を受ける可能性】【自然災害の被害を受ける可能性】の11カテゴリが抽出され、身体面、精神・心理面、死、生活基盤、損害に関するリスクという5側面に大別された。

2. 都市部の独居高齢者における危機管理としての近隣との交流：近隣との交流の構成要素は、【健康づくり活動を活用した健康管理】【共助に備えた平常時の近隣との関係構築】【ライフサイクルの中で築いた互酬】【危機後の近隣者からの支援の受け入れ】【安否確認の体制づくり】【災害時の共助に関する近隣との合意】の6カテゴリであった。【共助に備えた平常時の近隣との関係構築】として、平常時から近隣との円満な関係を意図した危機を想定した会話、立ち入りすぎない「ほどよい」付き合い、信頼できる人との慎重な交流等がみられた。【ライフサイクルの中で築いた互酬】は、子育てや介護における近隣との共同体験や、40年に渡って共にコミュニティを作ってきた体験を基盤とした近隣関係であり、死や災害を含む重大な危機にも対応していた。【安否確認の体制づくり】において、独居高齢者としての自分を近隣に知っておいて貰うこと、安否確認されるための環境の開放により、生活環境を可視化し「見守られ」の体制を構築していた。

3. 都市部の独居高齢者における危機管理の方法からみた類型：都市部の独居高齢者における生活上のリスクに対する危機管理方法として、自己管理、近隣との交流の活用、別居子・親戚による支援の活用、契約とサービスの活用がみられた。危機管理方法の組み合わせにより『自己管理＋近隣型』『近隣＋家族型』『要援護総合型』『予防的総合型』『契約型』の5類型に分類された。『自己管理＋近隣型』『近隣＋家族型』の人は、居住年数が長く、死や災害等の重大なリスクに関しても近隣との関係による対応が可能だった。『要援護総合型』は居住年数が短く、疾患や障害を有する人々であり、身体面、精神・心理面、死、生活基盤、損害の全リスクに対して近隣と他の手段を補完的に組み合わせる危機管理を行っていた。『予防的総合型』は自立度が高く、かつ危機管理意識の高い人たちであった。『契約型』は、疾患や障害を有し、身体、精神(孤立)、死、生活基盤に関する多様なリスクを有するが、介護保険サービスによるシステム化した危機管理が機能していた。

考察

従来の高齢者に関する研究では独居という生活形態自体がリスクとして扱われてきたが、本研究において都市部の独居高齢者のリスクは身体面、精神・心理面、死、生活基盤、損害の5側面から成ることを明らかにした。また都市部の独居高齢者の危機管理方法として、自己管理、近隣との交流、別居子・親戚からの支援の活用、サービスと契約の活用があり、その組み合わせによる類型が明らかとなり、対象特性別の危機への予防的対策の枠組に有用と考えられた。ライフサイクルの中で築いた互酬は、重大なリスクにも対応しており、都市部においても近隣関係が危機管理に有用な資源であることを実証した。近隣との互酬が築かれていない高齢者は、近隣者を意識した独居であることの自己開示、及び「見守られ」のための生活の可視化という危機管理に有用な関係構築の意図と行動を明らかにした。

結論

都市部の独居高齢者における危機管理として、近隣との共助に備えた平常時の意図的な関係構築、ライフサイクルの中で築いた互酬、安否確認の体制づくり、災害時の共助に関する近隣との合意及び、危機管理の類型がみられ、自助、互助・共助を支持・促進するための公助の役割が示唆された。